幾何学 II 演習問題解答 No.3 2019年10月23日

問題 $\mathbf{11}$ (1) M 上の別の局所座標 $\{y_i\}$ をとるとき微分形式 $dx_I,\,dy_J$ の間には次の形の関係がある.

$$dx_I = \sum_{J} c_{I,J}(x) dy_J$$

ここで $c_{I,J}(x)$ は M 上の局所的な関数であり、t にはよらない。従って $\{y_j\}$ による局所表示で計算すると、 K^p は

$$\sum_{I} f_{I}(x,t)dx_{I} = \sum_{I,J} f_{I}(x,t)c_{I,J}(x)dy_{J} \mapsto 0$$

$$\sum_{I} f_{I}(x,t)dt \wedge dx_{I} = \sum_{I,J} f_{I}(x,t)c_{I,J}(x)dt \wedge dy_{J} \mapsto \sum_{I,J} \left(\int_{0}^{t} f_{I}(x,s)c_{I,J}(x)ds \right) dy_{J}$$

$$= \sum_{I} \left(\int_{0}^{t} f_{I}(x,s)ds \right) dx_{I}$$

で与えられる. これは同じ結果を与えている.

(2) 局所的に $\sum_I f_I(x,t) dx_I$ の形に表示される微分形式を type I の形式と呼び, $\sum_I f_I(x,t) dt \wedge dx_I$ の形に表示される微分形式を type II の形式と呼んだ. 等式

$$(1 - \pi^* \circ s^*)\omega = (dK + Kd)\omega$$

の両辺を type I, type II の微分形式について確かめればよい.

(type I): 局所的に $\omega = \sum_I f_I(x,t) dx_I$ と書く. このとき

左辺 =
$$\sum_{I} (f_{I}(x,t) - f(x,0)) dx_{I}$$

右辺 = $K \left(d \sum_{I} f_{I}(x,t) dx_{I} \right)$
= $K \left(\sum_{I} \frac{\partial f_{I}}{\partial t}(x,t) dt \wedge dx_{I} + \sum_{I,j} \frac{\partial f_{I}}{\partial x_{j}}(x,t) dx_{j} \wedge dx_{I} \right)$
= $\sum_{I} \left(\int_{0}^{t} \frac{\partial f_{I}}{\partial t}(x,s) ds \right) dx_{I} =$ 左辺.

(type II): 局所的に $\omega = \sum_I f_I(x,t) dt \wedge dx_I$ と書くとき,

左辺 =
$$\sum_{I} f_{I}(x,t)dt \wedge dx_{I}$$

右辺 =
$$d\left(\sum_{I}\left(\int_{0}^{t}f_{I}(x,s)ds\right)dx_{I}\right) + K\left(\sum_{I,j}\frac{\partial f_{I}}{\partial x_{j}}(x,t)dx_{j} \wedge dt \wedge dx_{I}\right)$$

= $\sum_{I}f_{I}(x,t)dt \wedge dx_{I} + \sum_{I,j}\left(\int_{0}^{t}\frac{\partial f_{I}}{\partial x_{j}}(x,s)ds\right)dx_{j} \wedge dx_{I} - \sum_{I,j}\left(\int_{0}^{t}\frac{\partial f_{I}}{\partial x_{j}}(x,s)ds\right)dx_{j} \wedge dx_{I}$
= 左辺

問題 12 (1) $(\omega+d\rho)\wedge\tau=\omega\wedge\tau+d\rho\wedge\tau=\omega\wedge\tau+d(\rho\wedge\tau)$. ただし、最後のステップで τ が閉微分形式であることとライプニッツ則を使った。よって $[(\omega+d\rho)\wedge\tau]=[\omega\wedge\tau]$ であり、 $[\omega]$ を代表する微分形式の取り方によらない。

同様に、 $\omega \wedge (\tau + d\rho) = \omega \wedge \tau + \omega \wedge d\rho = \omega \wedge \tau + (-1)^{\deg \omega} d(\omega \wedge \rho)$ より、 $[\omega \wedge (\tau + d\rho)] = [\omega \wedge \tau]$. すなわち $[\tau]$ を代表する微分形式の取り方によらない.

- (2) 単位元は $\Omega^0(M)$ に属する定数関数 1 で与えられる.1 は閉微分形式であるから,コホモロジー類 [1] を定め,また $[1] \wedge [\omega] = [\omega] \wedge [1] = [\omega]$ を満たす.
- (3) $\varphi^*1=1$ より φ^* は単位元を保つ. また積を保つことは、微分形式の引き戻しに対して成り立つ式 $\varphi^*(\omega \wedge \tau)=\varphi^*\omega \wedge \varphi^*\tau$ から直ちに従う. 実際、 $\varphi^*([\omega] \wedge [\tau])=\varphi^*[\omega \wedge \tau]=[\varphi^*(\omega \wedge \tau)]=[\varphi^*\omega \wedge \varphi^*\tau]=[\varphi^*\omega] \wedge [\varphi^*\tau].$

問題 13 $s_0, s_1: M \to M \times \mathbb{R}$ を $s_0(x) = (x, 0), s_1(x) = (x, 1)$ で定めておく. ホモトピーの定義から $f = H \circ s_0, g = H \circ s_1$ である. $\pi \circ s_1 = 1_M$ だから,

$$f = H \circ s_0 = H \circ s_0 \circ \pi \circ s_1$$

と書き直せる. 従って

$$f^* = s_1^* \circ (\pi^* \circ s_0^*) \circ H^*$$
$$g^* = s_1^* \circ H^*$$

問題 11 から, $\pi^* \circ s_0^*$ と 1 の間のチェインホモトピーは K^p で与えられる.従って f^* と g^* の間のチェインホモトピー $L^p\colon \Omega^p(N)\to \Omega^{p-1}(M)$ は次のように定めればよさそうである.

$$L^p = s_1^* \circ K^p \circ H^*$$

実際, $\omega \in \Omega^p(N)$ に対して

$$\begin{split} (dL^p + L^{p+1}d)\omega &= ds_1^*K^pH^*\omega + s_1^*K^{p+1}H^*(d\omega) \\ &= s_1^*dK^pH^*\omega + s_1^*K^{p+1}dH^*\omega \\ &= s_1^*(dK^p + K^{p+1}d)H^*(\omega) \\ &= s_1^*(1 - \pi^*s_0^*)H^*(\omega) \qquad (∵ 問題 \ 10 \ \text{の式から}) \\ &= (H \circ s_1)^*\omega - (H \circ s_0 \circ \pi \circ s_1)^*\omega = g^*\omega - f^*\omega. \end{split}$$

注意: チェインホモトピー L はホモトピー H(x,t) で引き戻した微分形式をパラメータ t に関して [0,1] 区間上「積分する」写像になっている.

問題 14 (1) コホモロジーは $H^0(C) = 0$, $H^1(C) \cong \mathbb{Z}/2\mathbb{Z}$, $H^0(D) \cong \mathbb{Z}$, またそれ以外の次数では 0 である.また f がコホモロジーに誘導する写像は 0 写像である.(各次数 k に対して $H^k(C)$, $H^k(D)$ のどちらかがゼロであるため,0 写像しかない.)

(2) もし 0 写像とチェインホモトピックであったとすれば,準同型 $K^1\colon C^1\to D^0$, $K^0\colon C^0\to D^{-1}$ が存在して $1_{C^0}=K^1\circ d^0+d^{-1}\circ K^0$ である. $D^{-1}=0$ であるから $K^0=0$.従って $1_{C^0}=K^1\circ d^0$.また $C^1=D^0=\mathbb{Z}$ であるから K^1 はある整数 m を

掛ける写像である. d^0 は 2 倍写像であるから, 2m=1. これはあり得ない. 従って f は 0 とチェインホモトピックではない.

注意: つまり、チェイン写像がコホモロジーに0写像を誘導しても、0写像とチェインホモトピックとは限らない。上の例では

$${$$
 $\{$ チェイン写像 $\} /$ チェインホモトピー $\cong \mathbb{Z}/2\mathbb{Z}$

となっていることも容易にチェックできる.

問題 15 レトラクション $r\colon \mathbb{C}^{\times} \to S^1$ は r(z)=z/|z| で与えられる。 $i\colon S^1 \to \mathbb{C}^{\times}$ を包含写像とする。 $i\circ r$ と $1_{\mathbb{C}^{\times}}$ の間のホモトピー $H\colon \mathbb{C}^{\times} \times [0,1] \to \mathbb{C}^{\times}$ は

$$H(z,t) = tz + (1-t)\frac{z}{|z|}$$

で与えられる. (H(z,t) はゼロにならないことに注意する.)